

城下西南の要

筑後の流れとともに
城を守り、支える

まず、久留米城とその城下町の風景を想像してみよう。

今から150年以上前の江戸時代、筑後川を渡って走る鉄道や駅舎はなかった。交通・輸送手段といえば、陸では人が歩くか牛馬を用い、河川では筏や船を使う。藩の役所はあるが20階建てではないし、家屋といえば武家も商家も平屋かせいせい2階建てだ。

この辺りで最も標高が高いのは、丘陵の頂に築造された久留米城本丸（現

篠山神社）である。反り立つ石垣の各隅に三層の櫓を7基配し、それを二層の多間櫓で連結して、藩主が政務を執る御殿を囲む。防衛上、本丸から視界を遮る木々はなく、藩主は城下、藩領を眺望した。勇壮な石垣と櫓がみせる威容は、藩士・領民、そして行き交う人々にとってランドマークである。

久留米城は、本丸から南に向かって二の丸、三の丸、外郭（四の丸）が堀を挟みながら連なる。これを辿って本丸から城外の通町（町人地）まで歩けば、緩やかに下ることになる。城外においても、武家地は比較的高所に整備された。城下西南に位置する京隈小路は、主に上・中級藩士の屋敷地とな

る。この地区の切り立った岩の上、筑後川沿いの低地を挟んで本丸と向い合う場所に、梅林寺は創建された。山号の「江南」の2字は、大河の南の意である。すなわち本丸同様、天然の堀として筑後川を擁し、梅林寺一帯は久留米城の出丸の様相を呈する。

久留米藩初代藩主有馬豊氏が、自身と将来の一族の墓所として選んだのは、そのような要地であった。

豊氏自ら没後なお、久留米城の護りを果たそうとしたものであろうか。また天下泰平の時代、本丸から拝する先祖代々の墓所は、有馬の治世の来し方を振り返り、その行く末を祈念する、藩主の心の支えともなつたろうか。

梅林寺四百年 時が織りなす歴史と文化

21万石大名の菩提寺

永遠に受け継がれし

御霊眠る聖域

梅林寺は、久留米藩21万石を治めた大名有馬家の菩提寺である。元和7年（1621）、初代藩主有馬豊氏によって創建された。寺号は、豊氏の父で藩祖とされる則頼の法名「梅林院殿」に由来する。寺領は始め150石、2代藩主忠頼の代に200石加増された。寺町少林寺、鯉坂村普濟寺（現小郡市）など8か寺を末寺とした。

創建以来、藩主有馬家の菩提を弔い、その治世とともに歩み栄えた。有馬家墓所は、江戸時代の約250年、11代にわたる歴史と文化が織りなす、荘厳にして神聖なる霊域である。

その静寂に満ちた空間を訪れた時、私たちは本市最古の木造建築群である5棟の霊屋（国指定重要文化財）や、重厚な石造りの墓塔・供養塔を目にする。その姿に圧倒されたり、久留米藩の時代に想いを馳せたりもするだろう。ただし眼前にするのは、地上にある建築の外部構造や、石造の上部構造のみである（墓所の配置は裏面のマップへ）。



九州一の修業道場

静かなる緊張、
厳かなる空気、僧の道

400年の歴史とともに、今日に至る伽藍（寺院の建物群）が整えられた。創建50年ほど経った寛文10年（1670）の記録「寺社開基」によると、当時の伽藍は次の通りである。

| | | |
|-----|--------|----|
| 方丈 | 6間×9間 | 萱葺 |
| 庫裏 | 6間×10間 | 瓦葺 |
| 書院 | 3間×8間 | 瓦葺 |
| 中門 | 小板葺 | |
| 開山堂 | 3間×4間 | 瓦葺 |

さらに鎮守社として山王権現社1宇があったという。

明治維新を迎え、藩の保護を失った梅林寺は、江戸時代の伽藍の多くを失う。明治20年代より大正時代にかけて、市内の有力商家らの援助を受けて復興が進められ、現在の景観が整備された（境内の配置は裏面のマップへ）。

日々厳しい修行が行われ、境内では肅然とした空気が漂う。

禅堂の生活は、夏は開静（起床）3時、真冬は4時に始まる。一日の行事は、梵鐘や太鼓などの鳴り物によって進行する。平常の時間割りに、酷暑の夏も厳寒の冬も関わりない。

仏の美と祈り

守り伝えし古刹の寺宝
歴史を映す文化財

彫刻・絵画・書蹟・工芸等、禅宗の名刹に相応しく、寺宝・什物が伝わり、梅林寺の歴史を物語る。

仏像彫刻では、位牌堂に安置された木造薬師如来坐像が最も古い紀年銘を持つ。当初、阿弥陀如来像として造立されたもので、膝裏の墨書銘「正和四年（1315）」がその造立か修理の年を示す。本堂の本尊である木造如意輪観音坐像も墨書銘により、建徳2年（1371）に肥後国八代庄岡村（現熊本県八代市）に所在した光福寺の本尊として造立されたことが分かる。

絵画では、絹本着色釈迦三尊像（国指定重要文化財）や、朝鮮半島で描かれた絹本着色楊柳観音像（市指定文化財）などの重要な作品がある。前者は鎌倉時代、後者は朝鮮李朝時代の宣徳2年（1427）の作である。開基以降では、住職や藩主の肖像画、久留米藩御用絵師三谷家の作品が、藩主家の菩提を弔う寺史資料として注目される。

昭和56年度の福岡県による確認調査では、什宝類約1千点を数えている。信仰とともに大切な寺宝・什物を守り伝えていくためには、文化財保存の観点からの管理や措置も欠かせない。

例年、気候の良い秋季を選んで書画類を中心に曝涼（風を通す干し）を行い、観覧の機会にもしている。近年、前述の絹本着色楊柳観音像や柳に柴垣図屏風（長谷川等伯筆）に、装演という伝統的な技術による修理を施すなど、文化財でもある寺宝を未来になく取り組みがなされている。

四季景色

春を告げる梅の香り

秋を彩る木々の紅葉

当寺が梅の名所として、「名実ともに」梅林寺となったのは、梅林寺外苑が竣功してからのことである。外苑は、開山350年忌に際し、檀信徒の理解と協力、第17世玄照老大師の英断、石橋正二郎（ブリヂストンタイヤ社長・当時）の寄附により、昭和33年（1958）4月に竣功した。筑後川沿いに立てば眼下の清流から遠方に脊振連山を眺み、変化に富む地形を一人歩けば閑寂を感じ、春を告げる梅の花は紅白の色と香りで楽しませてくれる。夏には鮮やかな緑樹が、木陰の涼をつくる。

境内では、武家屋敷から移されたソテツ（久留米市指定天然記念物）が6〜10月頃に花を咲かせる。秋になれば紅葉や銀杏が色づく。その葉が墓参の道に舞えば冬の気配に気づく。すっかり冬を迎えれば、落葉した木々の中、松樹が寂然と佇むようである。